



京都でフィールドワークを開催 ～北野天満宮～賀茂別雷神社～風俗博物館～

椎名潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）



小春日和の京都で実施されたフィールドワーク参加者たち（北野天満宮楼門にて）

神道国際学会では毎年、「神道セミナー」や「国際シンポジウム」を開催してきたが、今年は初めての試みとして、実際に神社を訪問し、その歴史的背景や日本文化に与えた影響などを調査・研究しようという「フィールドワーク」を企画。その第一回として、平成二十七年十月三十一日、北野天満宮、賀茂別雷神社（上賀茂神社）、そして平安時代四百年間の生活様式や装束の変遷を感じ取れる「風俗博物館」を訪れる京都フィールドワークを実施した。同フィールドワークには、本学会からジョン・グリーン副会長、三宅善信理事長、マイケル・パイ理事、椎名潤監事とスタッフの五人、それに関西を中心に、遠くは東京や名古屋から会員・一般参加者二十人が参加し、艶やかに色づきはじめた京都の一日を満喫した。

一行は京都駅南口に集合し、大型バスで一路、上京区の北野天満宮へ。

「天神さん」の愛称で知られる北野天満宮は、平安時代の政治家・文学者で、学問の神様・菅原道真（菅公）を祀っており、全国一万二千社はあるといわれる「天満宮」・「天神社」の宗祀（総本社）である。平安京の乾（北西）の地に創建されてから千有余年の長きにわたり、国家鎮護・皇城鎮護の神として朝廷および皇室の崇敬を受けたほか、学問をはじめ、芸能、農耕、厄除け

などの神として一般庶民にも親しまれ、今日に至っている。

また平成三十九年に斎行する「千二百五十年半萬燈祭」に向けて、境内整備事業を進めているが、国宝「北野天神縁起絵巻」の有名な場面「菅公紅梅殿別離」の図に因む紅梅殿の移築がこのほど完了。十月十五日には紅梅殿のこけら落としとして、歌舞伎役者の市川海老蔵さんによる「延年の舞」が奉納されたばかりであった。

一行ははじめに、豊臣秀吉の遺命を受けた豊臣秀頼の造営に

なる八棟造り（権現造り）の社殿（国宝）の拝殿に昇殿し、代表して三宅理事長が玉串を奉奠した。さらに、橋重十九宮司から歓迎のあいさつと北野天満宮創建の説明をいただいた。

「菅公はもともと、縄文人の流れを汲む野見宿禰の系統に連なるお方で、幼少の頃より秀才の誉れ高く、若くして学者の最高位である文章博士となり、醍醐天皇の昌泰二年（西暦八九九年）には右大臣に任命されました。当時の文官のうちの九十パーセントが、菅公の門下生であったといわれるほどでした。しかし、あまりにも順調な昇進に不満を持つ人々によって、誹謗中傷が起こり、やがて無実の罪により、右大臣を解任されて、九州の大宰府に西遷の身となりました。そして二年後の延喜三年（九二三年）、かの地で五十九歳の生涯を閉じられたのです。朝廷はのちに菅公の冤罪を認め、元



北野天満宮にて正式参拝する一行



遷宮直後の上賀茂神社本殿に正式参拝

の右大臣に復し、正一位左大臣、太政大臣の位を追贈しています。京の都は湿気が多く、いたるところにカビが生え、怨霊もさかんに現れたようです。そうした

ことと関連しているのか、菅公が亡くなってから44年後になって、ご神託があったここ北野の地に神殿を創建し、御霊をお祀りしたのが当宮の始まりです」

このあと、豊臣秀吉が洛中洛外の境界として築いた土塁の遺構「御土居」（史跡）とそれに併設されている「もみじ苑」（樹齢三百五十年〜四百年の古木が二百五十本あり）を拝観。特に境内西側に広がる御土居の展望所（高台）から望む権現造り（日光東照宮と同じ形式）の国宝・本殿の景観は圧巻であった。

さらに一行は宝物殿を訪れ、

菅公の一生と天満宮に祀られた由来などを描いた国宝「北野天神縁起」をはじめ、太刀（國綱・恒次）、長谷川等伯の筆になる絵馬（昌俊・弁慶相騎図）、硯箱（橋松竹鶴亀蔭絵文台）、舞楽図「延年の舞」、「北野西京神人文書」（＝以上・重要文化財）や北野曼茶羅図、屏風、茶道具など、優れた文化遺産を鑑賞し、京都の伝統美を堪能した。

また境内には、十九回目の遣唐使の無事帰朝を祈って建てられた地主神社もある。

次は北区の賀茂別雷神社（上賀茂神社）へ。

そこまでの車中では、マイケル・パイ理事が北野天満宮に関連し、天満宮めぐりを創設した明治時代の北海道開拓者・松浦武四郎や神仏習合時代の影響などについての解説があった。

マイケル・パイ理事によると、松浦武四郎は六度にわたって蝦夷地を探検し、はじめて「北海道」と名付けたほか、アイヌ語の地名をもとに郡名を選んだりした探検家で、天神（菅公）を篤く信仰していたという。そして全国各地にある菅公ゆかりの神社を訪ね歩き、石塔を建て、

神鏡を奉納したのである。

さらに松浦武四郎は、これらの神社のうちの二十五か所を厳選して、「聖跡二十五霊社巡拝双六」も考案している。

一番が菅公生誕の地に建てられた菅原院天満宮神社（京都市上京一番区）で、五番が菅公が大宰府へ左遷された時、この地に立ち寄り、「我が魂長くこの地にとどまるべし」と名残りを惜しんだところに建つ長岡天満宮（京都府長岡京）、二十三番が菅公の薨地に建つ大宰府天満宮（福岡県太宰府市）、そして二十五番目の「上がり」が北野天満宮というように、絵入りで天神信仰を分かり易く説明している。

神仏習合時代の影響としては、毎月二十一日が弘法大師、二十二日が弁財天、二十四日が地藏菩薩、二十五日が天神さんというように、縁日として知られるほか、天満宮の本持仏として十一面観世音菩薩が祀られていることも紹介された。

これらの車中講義が終わった頃に賀茂別雷神社（上賀茂神社）に平成六年に世界文化遺産に指定）に到着。

上賀茂神社は十月十五日に第四十二回目の式年遷宮（正遷宮）を終えたばかりで、出迎えていただいた田中安比呂宮司は、同神社の第二百四代目というお方であった。

田中宮司によると、上賀茂神

社は京都で最も古く、その起源は遙か二千六百年前に遡るといふ。歴代天皇の崇敬篤く、行幸啓も数多くあり、国家の重大事には必ず、奉幣祈願が行われるなど、明治以降、終戦まで官幣大社として、伊勢の神宮に次ぐ格式を有した。

以下は田中宮司の説明である。「遷宮というと、伊勢神宮が二十年ごとで知られていますが、本社の場合は二十一年目ごとにやらせていただいております。遷宮は「宮移し」といって、本来ならば新たにお宮を造るのですが、本社の本殿は国宝ですから、檜皮葺きの屋根の葺き替えや不都合などところの修復をもつて、遷宮といたしました。十月十六日には天皇陛下の勅使による奉幣祭をご奉仕いたしました。その直後に、神道国際学会の会員の皆様がお揃いでご参拝いただき、ありがとうございます。」

また一行は境内で、二ノ鳥居



上賀茂神社境内にて神職より説明を受ける

を入った正面にある「立砂」（三角錐の砂山二対）の説明を受けた。これは神山を象つたもので、陰と陽、荒御魂と和御魂という二神を現しているということであった。さらに同神社の最も神聖な場所である「岩上」へと進む。

賀茂祭（葵祭）の際には、宮司がこの岩の上に蹲踞して勅使と対面し、御祭文に対して、神の意志を伝える「返祝詞」を申すところ。神と人との心の通路でもあり、古代祭祀の形を今に伝える場所で、いわば最も「気が集中する」現代のパワースポットといったところである。

さらに式年遷宮で綺麗に荘厳された本殿へ。すぐ左隣が遷宮のための修復工事中に、祭神の賀茂別雷神大神を仮にお祀りしていた「権殿」で、一行は本殿と権殿前の玉砂利まで立ち入りを許された。

上賀茂神社の説明によると、賀茂祭＝葵祭の「葵」は二葉で、もともとは「アフビ」という言葉が原形。「アフ」は会う。「ヒ」は神様の御霊、ご神霊のことで、ご神霊に会うことを現しているとか。また本殿に対して権殿という配置も、まさに二葉の葵のようであり、このほか社殿、装束も皆、二葉の葵を使用しているという。

また二葉の葵には小さな花があしらわれている。上賀茂神社を篤く信仰していた徳川家康は、この小さな花を葉に変えて三葉

にし、徳川の「三つ葉葵」を創造したのではないかと言われているのだが……。

上賀茂神社では、ジョン・ブリン副会長が「上賀茂神社と明治維新」と題して講義を行った。

文久三年（一八六三）、十四代将軍・徳川家茂が二百三十年ぶりに上洛し、孝明天皇に拝謁するという前代未聞の事件が起こる。徳川幕府の最も動揺していた時期で、「八月十八日政変」が有名だが、この将軍上洛こそ画期的であった。

将軍が天皇に拝謁するということで、幕藩体制の崩壊がはじまることになる。このことと賀茂社とは密接に関係があり、拝謁の四日後、孝明天皇は御所を出て、ここ賀茂社に行幸する。すなわち天皇が主で、将軍が従という関係を、天下に見せつける一大イベントであった。明治維新まではあと五年。

賀茂社の神官たちは、王政復古により、これまで以上に朝廷・皇室と深いつながりを持てると期待したが、それは思い違いであった。形式上は「官幣大社」の社格を付与されるが、それは実質を伴わないものであり、明治四年の土地令により、五千ヘクタールもあった土地はほとんど明治政府に取り上げられた。さらに社家の追放（世襲制の禁止）、神仏分離が実施され、賀

茂社は完全なる神道的な空間へと変えられた。

また葵祭はもともと神社と皇室を結びつけるものであったが、次第に形骸化されていった。明治維新後、天皇や皇族は、ほとんど東京へ移ってしまったため、葵祭は皇室の年中行事からも外され、「私祭」としてのみ存在していた。

それを今日のような葵祭に復活させようとしたのが岩倉具視で、明治十六年に「伝統的な京都を復活させるには葵祭の復活が不可欠である」という趣旨の意見書を明治政府に提出。末期ガンであった岩倉は、間もなく死去したが、彼の死後の明治十



風俗博物館で井筒與兵衛館長から平安時代の装束・生活を学ぶ

実は明治維新で、神社は優遇されたといわれているが、実態は「国に見捨てられた」のである。かくして、ずっと護られたのは伊勢神宮と靖国神社だけというのが私（ジョン・グリーン）の意見である。

最後は、古代から近代にいたるまでの日本の風俗・衣装の実物を展示する「風俗博物館」（下京区）へ。「源氏物語」の登場人物や装束、そして生活様式を忠実に再現したもので、千年の時空を超えて、平安時代の世界を垣間見ることができた。

三宅善信理事長 フランススコ教皇と二度謁見



本学会の三宅善信理事長は、昨年8月末と10月末の二度にわたって、全世界に十二億人の信徒を擁するローマ・カトリック教会の最高指導者であるフランススコ教皇と謁見した。

三宅理事長は、長年にわたって諸宗教対話の世界で大きな業績を残しているが、8月にはパチカン諸宗教対話評議会において、神道とカトリックの対話を始めるための協議を行うためローマを訪れ、また、10月にはグレゴリアン大学で開催された第二パチカン公会議五十周年記念国際シンポに招かれた際に、それぞれ特別に謁見を許されたもの。



伊勢神宮内宮

マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授）

シリーズ第一弾となるこの絵葉書には、伊勢神宮内宮へと続く五十鈴川にかかる橋のたもとにある鳥居が写っています。裏面には宛名欄と親書欄を分けるラインが印刷されており、これによってこの絵葉書が1907年（明治40年）から1918年（大正7年）の間に印刷されたものであることがわかります。この絵葉書は非常に人気があったようで、さまざまなバージョンで何度も再発行されました。後期に印刷されたものは「伊勢名所」と名づけられ、説明の英訳もつけられています。また、この絵葉書には見られる松の木は後期のバージョンでは消し込まれているのです。

この絵葉書は伊勢神宮のさまざまな姿を示す10枚セットの中の1枚です。その全てに八花弁の紫色の記念スタンプが押されていますが、日付は入っていません。また宛名面には切手を貼る欄として神社のモチーフがあり、10枚それぞれに詩が印刷されて

います。8枚は和文の詩ですが残り2枚は漢詩が印刷されています。

この絵葉書には梅洞の号で知られる林春信（1643-1666）の漢詩が印刷されています。春信は儒学者林羅山の孫でした。

絵葉書では「看」の字が不明瞭ではありますが、以下のように読み取れます。

五十鈴川上
金波洗点塵
水天一色
請看月分身

英訳するとこのようになるでしょう。

On the River Isuzu
Golden waves wash over grains of



sand.

Sky and water share their colour,
See the part-bodies of the moon.

誰かが橋の上からさざ波の五十鈴川を覗き込み、水面に映る月を眺めているようです。月は空だけでなく川面にもあるのです。空と川は穏やかな流れの中で融合していくようです。

（Pre-modern Japanese Studies の仲間たちの協力に深く感謝します）

鼎談『聖徳太子思想の中心にあった神道』(第2回)

聖徳宗総本山法隆寺管長

大野玄妙

×

マールブルク大学名誉教授

マイケル・パイ

×

神道国際学会理事長

三宅善信



昨年五月十八日、日本で最初にユネスコ世界遺産に登録された世界最古の木造建造物として知られる法隆寺で、聖徳宗管長の大野玄妙殿下から教えを頂く機会を得た。大野管長独自の聖徳太子研究から明らかになる日本人の精神性に関して、マイケル・パイ神道国際学会理事・三宅善信神道国際学会理事長との鼎談内容を前号に続き紹介する。

聖徳太子は法相宗を知らなかった

三宅 飛鳥時代、日本は中国

(隋・唐) からほとんど社会制度を取り入れますよね。例えば、都の条里制にしても、冠位十二階にしても、朝廷や官僚の服装にしても、国家の制度として中国式を取り入れましたし、頭髪も耳の両横で止める角髪(みずら)から、頭頂部に髻(まげ)をつくって冠を被ってすっかり中国風になりました。しかし、中国の歴代王朝で二十世紀の清朝に至るまでずっと続いた儒教の国家運営システムである「科挙」と「宦官」の制度は、生理的に日本には入りませんでした。また、仏教では、上座部仏教で言うところの「出家」と「戒律」が見事に避けられ、それ以外の經典や仏像といった部分だけが取り入れられました。日本は自らのテキストに合わないものを巧みに排除して、儒教や仏教のテキストだけを取り入れたように、無意識のうちに選択摂取みたいな

ことが行われました。

仏教にしても、中国大陸や朝鮮半島では、王朝ごとに崇仏や廃仏と態度が極端に変わりましたが、日本では、外来の宗教である仏教を排除するのではなく、美しい仏像や仏教の尊い教えは戴くけれども、自分たちが従来していた伝統は変えない。たとえば言えば、仏教の「動物は食べてはいけない。肉食主義でなければならぬ」という教えに対して「仏教なんか嫌いなんです。だから、私は今まで通り肉を食べます」と仏教を全否定するのではなく、また逆に「仏教を尊重します。だから、今後一切動物の肉を食べません」という両極端な態度ではなく、それならば「今まで食べていた鹿肉は紅葉(もみぢ)にして、猪は牡丹(ぼたん)ということにすれば、ベジタリアンと言いながら大好きな肉も食べられるじゃないか」と、一種の「方便」を編み出したのだと思います。

大野 それは、歪められた思想だと思います。と申しますのは、

仏教は基本的に動物だけでなく、植物もバイ菌も総べてが「いのち」なんです。そして、基本的にはそれらの「いのち」には差別はありません。

パイ それは『法華経』に書いてありますね。

大野 はい。そうすると、当然私たちは生きている限り「不殺生戒」という戒律を守れない訳です。

三宅 そうだとすると、「アヒンサー(不殺生戒)」を金科玉条に置くジャイナ教のように、食べ物だけではなく衣類の元も動物物だという理解によって、たとえ素っ裸になったとしても、結局、人間は何かを食べないと生きていけない……。

大野 では、何故いったいそういうことを説くのかということですが、それはあくまでも、それに至る心。例えば、阿闍世王(アジャセ)の話(註:父の頻婆娑羅王(ビビサラ)を幽閉して餓死させ、王位を剥奪した)にしてもそうですが、たとえ親殺しの大罪を犯しても最終的に仏道を成ずる訳です。それ

は、やはり心です。心が転換したんですね。

パイ そうすると仏教の立場から、神道のいわゆる海の幸、山の幸を歓迎することになりますか？

大野 そうですね。三宅先生の仰ったように、日本に仏教が入ってきた段階で、基本的に日本はその最初から祖先から引き継いできた精神性や宗教観に基づいて取捨選択しているんです。ただ、先ほどパイ先生がお尋ねになった法相宗から分かれたということと関係してくるのです。そもそも、聖徳太子の時代に中国には法相宗という「宗派」は存在していませんでした。唐代になつてから、インドから玄奘三蔵法師が帰唐して訳出したテキストを素に、弟子の慈恩大師(きこんだいてし)が立てた学派が法相宗です。

三宅 いわゆる、法相・三論・俱舍・成実・華嚴・律宗の六つの学派のことですね。

大野 はい、そうですね。

パイ ということは、聖徳太子ご自身法相宗を知らなかったということですか？

大野 聖徳太子の時代には、中国ですら法相宗はまだできていませんから、太子は法相宗を知らなかったですね。

パイ では、ひとつ前の時代の仏教の話になるということです。

大野 例えば、『勝鬘経』の中で説かれていることで非常に大

きなウエイトを占めているものに如来蔵思想があります。この如来蔵思想を説明するには、後世の隋代以降の書物では、全て縁起観でもって説明します。ところが聖徳太子は、その部分の解釈については、正直に「解らない」と書いています(一同笑い)。

パイ 非常に興味深いお話です。中国と日本における仏教の進歩の歴史が目につかびますね。それから、法隆寺ではこれらの三つのお経(維摩経、勝鬘経、法華経)以外は、どのようなお経を使っておられますか？

大野 そうですね、『金光明経』や『涅槃経』などいろいろ使っていますね。よく「南都六宗」と言われますが、あれは平安時代になつてから、真言・天台という「平安二宗」に対する呼び名として作られた話です。それ以前は、三論宗や別三論宗というものもありますし、涅槃系も入っています。

三経が選ばれた意外な理由

パイ 聖徳太子が、数多(あまた)の經典の中からその三つを選んだ訳ですが、聖徳太子が本当に『勝鬘経義疏』をお書きになったとすれば——これを疑問視する人もいるかと思いますが、それはいったん脇に置いておいて——、聖徳太子がその三つを選んだ理由は何でしょうか？

大野 それは梁の時代に三大法師と呼ばれる三人の非常に優れた僧侶（法雲・智蔵・僧旻）が居られたのですが、彼らは梁の武帝の側近でした。そういう人たちは、いわゆる「成実大乘師」と呼ばれ、主に大乘経典を用いるんです。その時代にはインド仏教では重要な位置を占めていた成実論が仏教研究の入門コースとして広く認知されていたのですが、隋代の天台大師智顗によって、「成実論は小乗の仏教の経量部にすぎない」というふうに通小評価されるようになって、急速に衰えていきました。

パイ それには新たな見方もありますね。私は『維摩経』は、必ずしも小乗ではないと思うのですが……。

大野 そうですね。ですから、そういう状況下で、成実大乘師がいつたいたいということをしたかと申しますと、いわゆる「教相判釈」を行うんです。あの当時の学問僧は皆、やっています。この教相判釈では皆、「自分たちの仏教理解が正しい」と言ったことに後世ではなっています。が、本来、何故、教相判釈という動きが起ったかと申しますと、インドから中国に経典が伝わった際、それぞれの経典がインドで成立した順番にキツチリと中国へ伝わって



聖徳太子1390年御聖諱法要（2011年4月）

来たのなら良かったのですが、実際には、小乗も大乘も密教も、とにかく後先なくグチャグチャに入ってきたんです。そして、それらのテキストを片っ端から漢訳していったんです。

そこで混乱が生じたため、「私たちはこういう風に考えます」と理論立てて、釈尊が一代で説かれた教説を、その時代や教理の深さに応じて三期や五期に分類して系統立てたいわゆる「三教五時教判」というのを作ったんです。三教のうち、ひとつ目は頓教で、これは即座に悟りに導かれます。二番目は「漸教」で、徐々に、徐々に悟りに導かれます。そして、「不定教」これは、どちらの要素も定まっていらないことを表しています。

パイ 天台宗にも、それとよく似た「五時八教」というセオ

リーがありますね。

大野 はい、あります。ここでいう五時とは何かと申しますと、鳩摩羅什に始まる成実師たちによると、「阿含」、「般若」、「維摩」、「法華」、「涅槃」という五つの時代です。これはお釈迦様がお悟りになってから、いきなり悟りの本質である難しいことを教えてもかえって迷わずだけでよろしくないの、徐々に解るようにしてこられたという建前です。聖徳太子がそれらの経典の中から『維摩経』と『法華経』と『勝鬘経』を選ばれたのは、他の経典は皆、長いためです（一同笑い）。例えば、『大般若経』は六百巻！しかし『法華経』ははしれてます。聖徳太子の時代には一品足りないのですが、後に二十八品（章）となりました。『維摩経』は大した量ではないですし、『勝鬘経』にいたっては本当に短いです。聖徳太子は限られた時間内で仏教理解のエッセンスを示されたのだと思います。

*

鼎談は長く充実したものとなり、その内容は非常に興味深く、本年度中に別途、書籍化されることとなりました。ここに掲載しきれない分については書籍にてお届けします。（編集部）

連載 神道DNA

『ヨーロッパとは何か』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表 三宅善信

イスラム教過激派勢力による同時多発テロ事件がパリで起きた直後、私はG20諸宗教サミットに出席するため、トルコ最大の都市イスタンブールに数日間滞在した。G20諸宗教サミットとは、2006年以来G8主要国首脳会議開催国の宗教界が持ち回り当番となって毎年開催されてきたG8宗教指導者サミットが、従来の枠組みで開催することが困難になったことを受けて、中国・ブラジル・インドといった新興国にオーストラリア・サウジアラビア・南アフリカ等の資源国を加えて新たに世界経済のプレイヤーとなったG20首脳会議の開催に合わせて、宗教界の声を世界に向けて発信する手段として昨年再構築されたものである。

泥沼化した内戦を逃れて、2015年の一年間だけでも実に全国民の三分の一が難民となってシリア国外に脱出し、その内の数十万人が隣国トルコからギリシャや東欧諸国を経由して最終目的地であるドイツやフランスといった西欧諸国への移住を余儀なくされたことは、現下の国際情勢にとって最大の不安定要因である。15世紀にオスマン帝国の皇帝メフメト2世が造営したトプカプ宮殿の窓からは、ボスポラス海峡を行き交う船や対岸の街並

みがよく見えるが、同じイスタンブール市であるにもかかわらず、手前はヨーロッパであり対岸はアジアである。わずか幅2kmの細長いこの海峡が、古代ギリシャの昔からヨーロッパ世界とアジア世界を隔ててきた。

「アジア」とは、現在のトルコ共和国の大部分を占める黒海と地中海に挟まれたアナトリア半島地域の古称であるにもかかわらず、元来は古代文明揺籃の地メソポタミアやペルシャのことを指していた「東洋」という欧州中心史観の用語が、大航海時代以降、インドから中国や日本まで含めた地域全体を指す呼称となったように、「アジア」もまた、一半島の名前からシベリアの東端まで含めた広大な大陸を指す名称へと拡大された。因みに、「ヨーロッパ」という名称は、ギリシャ神話の主神ゼウスが白い雄牛に変身して攫ったフェニキア（現在のシリア北部）の王女「エウロペ」に由来する。二人がクレタ島に落ち着くまで、背中に美女エウロペを乗せた白い雄牛が走り回った地域をヨーロッパと呼ぶようになったそうである。

約二千年前、北をヨーロッパ、東をアジア、南

をアフリカの各大陸によって囲まれた地中海世界の覇者となったローマ帝国の西半分は、ゲルマン民族の大移動によって5世紀に滅亡したが、ローマ帝国の遺産とも言えるローマ字とローマ法は、現在に至るまでヨーロッパの国々に共通の統治原理となった。また、313年にコンスタンティヌス大帝によってキリスト教がローマ帝国の国教に定められた（『ミラノ勅令』）ことにより、キリスト教もまたヨーロッパ世界に共通する統合原理となった。因みに、かつては同じローマ帝国の版図であった地中海世界であっても、中近東や北アフリカ地域は、7世紀に新たにアラビア半島で勃興したウマイヤ帝国によって「イスラム化」、すなわち「シャリーア」と呼ばれるイスラム法によって統治されるようになったため、ヨーロッパとは文字も法体系も宗教も異なる「別世界」となってしまった。

このコンスタンティヌス大帝が「新しいローマ帝国」の首都としてヨーロッパとアジアの境界上に建設したのがコンスタンチノーブルであり、その帝国（ビザンツ帝国）は千年間続いたが、1453年にオスマン帝国のメフメト2世によってついに滅ぼされ、帝都もイスタンブールへと改称された。アジア大陸の東端に浮かぶ日本列島に一万年以上の長きにわたって定住してきた私たち日本人には、民族や宗教の興亡という感性が欠けているかもしれないが、古代から現代にいたるまで、世界の各地で起こっている多くの紛争の根源はここにあるということを忘れてはいけない。

話題のこの人

出雲の文化史を探求する

リチャード・トランス博士

オハイオ州立大学教授



日本人の様々な感情が
投影されたスサノオ像の
特質に迫る

日本の文学・地域文化史を研究の対象にしてきた。とりわけ今、関心を寄せるのは出雲地方の文化史だ。出雲に原点を持つスサノオノミコトの文学キャラクター、その変質、信仰的な拡散の解釈に取り組む。

出雲の山間部に住む村人に信仰された農業神。それがスサノオの原像だとするが、その異国性にも着眼し、「太古から出雲には新羅からの渡来人が住み、交易もあったのには注目すべき」と強調する。

じつは『出雲国風土記』が同神の活動を記すのは四カ所のみ。「だから出雲全体でみれば、その存在感はかなり薄い。しかし出雲文化における謎めいた、矛盾の多い、興味深い神がスサノオなんです」

「記紀」では、荒ぶる神、根の国の主人として、強烈な印象を我々に与える。「八世紀初めの朝廷には、スサノオを憎むべき神として創造する必要があった。神代史の作者は、出雲の語り部の話を解釈し、異国の威嚇的な

カミと融合していった」と、その過程を推測する。「前提には、出雲と朝鮮との緊密な関係、吉備や日本海に延びる出雲文化圏の成立があった。それが大和政権に脅威と危惧と不気味の念を起こさせたわけです」

朝廷はさらに、中央神話の正当性を強化するため、「出雲系が天孫系へ従属するための重要な役割をスサノオに演じさせた」と付言する。『風土記』では大國主とスサノオに系譜関係はないが、「記紀」は神統譜で二神を繋ぐ。「スサノオを大國主の祖先とし、そのスサノオが出雲に降り立つことで、のちに大國主が天孫へ国譲りすることもあるものになりました」

とは言え、スサノオ像はやがて複雑化し、広く民衆からも愛されていく。蘇民将来の話では、疫病を免れる方法を教えた武塔神と習合する。祇園社でも、祇園精舎の護神たる牛頭天王と一体化し、やはり防疫神として活躍する。本貫の出雲でも類似現象はあるという。「出雲の修験者が敬った蔵王権現は異国的な憤怒の様相だからこそスサノオと習合した」と指摘。さらに中世には、僧侶も加わり「中世神

話」という再解釈を施したことで、スサノオ信仰は、より全国へと広まったと論ずる。

「皮肉なことに、朝廷の思惑など無視して、スサノオは魅力的な神様になっていった。やはり神というのは、人間の意志など超越した、自在な存在なんですね」

様々な心象を各人が投射し得る神・スサノオ。「文学的に言えばブランク・スクリーンです。大和は出雲に対する恐れを投射した。民衆は何より恐れた疫病を投射した。そうやって複雑で多面的な神様に成長していった。スサノオが日本人に親しまれる理由は、人間の色んな感情を描写し、結晶しうるキャラクターだからだと思います」

エール大学大学院で東亜言語・文学を専攻。博士。現在、オハイオ州立大学教授。一九七一年以来、数多く来日し、各大学で客員研究員。このたび一年間、国際日本文化研究センターで外国人研究員を務めた。英文著書に『徳田秋声の小説と日本の新中流階級の出現』ほか。日本近代文学や日本地方文化史に関する論文多数。



神社巡り⑥

岩澤知子

武蔵御嶽神社〈歴史編〉

●東京都青梅市御岳山176番地

関東平野の西北に広がる広大な関東山地のうち、多摩川の源流をなす奥多摩の地に、標高929mの御岳山が聳えている。その山上に鎮座するのが、武蔵御嶽神社である。武蔵御嶽神社の名前の変遷は、この神社の長い歴史を物語る。創建は第十代崇神天皇七年にたけぬなかわわけのみこと武渟川別命が東方十二道を平定した時、おこなむちのみこと大己貴命とすくなひこなのみこと少彦名命を祀ったのが起源とされ、さらに奈良時代には、僧の行基が東国鎮護を祈願し、蔵王権現の像を安置したと伝えられる。平安時代の延喜式神名帳には「おおまとのつのおまつかみやしろ大麻止乃豆乃天神社」と記されていることから、古くから関東の霊山として信仰されてきた様子が伺える。その後、中世の山岳信仰の興隆とともに「ぶしゅうきんぶせん武州金峰山御嶽蔵王権現」と名前を変え、関東の修験の一大中心として、寺と神社が共存する神仏習合の形をとりながら、江戸時代後期に到るまで人々の信仰を集めてきた。現在のように「武蔵御嶽神社」と呼ばれるようになったのは、明治時代の神仏分離令による改名を受けてのことだ。時代の波を受けながら、このように神社は名前を

変え、その形を変化させてきたのだが、その底流にずっと変わらずにあったのは、関東平野に生きる人々の生活を支える山、「御岳山」への篤い信仰であったろう。

御岳山の山頂には現在30数件の宿坊が存在するが、この宿坊を営むのは「おし御師」と呼ばれる人々で、宿坊の主人であると同時に、御嶽神社の神主でもある。筆者が宿泊した宿坊のご主人は33代目で、祖先は鎌倉時代からこの御岳山に住み着き、集落を形成していたらしい。御岳山信仰が隆盛を極めるのは、しかしその後、江戸時代に入ってから。御岳山は江戸の西に位置する守り神として、徳川家の「武運長久」の祈願を始めとする祭祀の執行を任された。人々の社寺詣が盛んになる近世、みたけもうで御嶽詣も武蔵・相模を中心に関東一円に拡がり、農村を中心に「講」が組織されるようになる。ではなぜこの御岳山が農民たちの信仰対象になったのか。それは農耕を支える貴重な「水」が、他でもない御岳山によってもたらされるからだ。関東平野を流れ農村を潤す多摩川の水源は、奥多摩に聳えるこの御岳山にある。そう、御岳山は「五穀豊饒をもたらす水源の神」なのだ。崇敬者たちは「武州御嶽講」を組織して御岳山に参拝し、毎年の収穫を感謝するとともに、次年の豊作を祈願する。一方、神社と「講社（崇敬者）」をつなぐ御師たちは、収穫が終わる秋から春にかけて、山を下りて村々を回る「講社参り」を行い、一件一件に神社のお札を配って

神社の参道を埋め尽くす講社の石碑



祈禱を行った。その返礼として、講社の人々から御師に対しては、作物やお金「初穂」として奉納され、これが御岳山の経済的基盤を支えてきた。こうした「山」と「里」とをつなぐ宗教的かつ経済的交流が、近世以降の関東地方にしっかりと根付いていたのである。この御嶽神社の御師と講社との関係は、現代にまで引継がれる全国でも稀少な例となっており、御岳山の御師たちは、今でも年に一度、それぞれが関係を結ぶ講社に御嶽神社のお札を配って回る。わが宿坊のご主人は、今でも60講社（1講社あたりの戸数は約30件）を毎年巡回されると伺った。山と里とをつなぐ関係はここでは過去のものではなく、現在進行形の「生きた」歴史なのである。（次号につづく）

神都物語—伊勢神宮の近現代史

ジョン・グリーン[著]

吉川弘文館、2015年7月刊、181ページ、ISBN978-4-642-05805-6、1,700円(税別)

評／芳村正徳(神習教教主)



清浄に掃き清められた空間からは、神道的なものの以外の全てが排除され、整然とした佇まいの神宮は、平成26年に史上二度目の内閣総理大臣の参加による遷宮を無事に終えた。

この年、パワースポット・ブームもあってエネルギーと癒しを求めた人々を加え参拝者は900万人を数えた。900万人という数字は、江戸時代の例年の参拝者数が40～50万人で60年ごとのお蔭参りの際に多くて300万人という数字から考えるといかに多数の人々が参拝したかがわかる。

参拝の度に目にする神宮は、「今も昔も変わらぬ」ものではなく、特に明治維新以後、実はダイナミックに変化してきているということが分かる。維新は昭和の戦前と戦後以上に我が国に大きな変化をもたらしたが、神宮も同様に時代を通して大きな変貌を遂げた。維新後第一に、江戸時代のように庶民が奇跡や癒しを求める巡礼地としての神宮の境内の様相は国家君主の祖先を祀る宮で国家にとってこの上なく聖なる場へと変容する。

一貫して国家が優遇し、天照大神の子孫である天皇は神話との整合性を高めるために寺を廃することから地名変更まで徹底して神宮周辺の仏教的なものを一切排除したのだ。700家を超える御師たちを免職にすることによる連鎖反応によって数千人の人が一夜にして職を失った。これは神宮にとっても宇治と山田の財政にも大きな影響をもたらした。また26もの明治以前の儀式が廃止され新しい儀礼が21も取り入れられた。境内の光景も訪れた人々が自由に参拝する空間からそれをより秩序づける空間へと変化させた。こうして特別な「天皇の大廟」とし天皇の権威を裏付ける存在としての位置付けを本書が強調したのである。

一時、困窮状態に陥った神宮は、全国の神社の力を借りながら御師に頼らずに大麻を頒布できるように体制を整備し、参拝が減ることによって収入が大幅

に減ってしまった宇治と山田は財界他の協力やメディアを使いながら神宮を取り巻くその周辺を「神都」と位置付けて、やはり変貌を遂げて行く。

政治や権力との関係性を考慮すると当然のことながらそれは宗教にも及ぶ。国家のあり方や方向性、社会の変化、メディアの報道が神宮の存在を、そして国民と神宮の関係を少しずつ変化させてゆく。もちろん神宮または神道側からの主体的な変化もあり、その後の大正、戦前の昭和、そして戦後、現代とその変貌ぶりは本書で確認する限り想像を大きく超えたものであった。それは天皇の大廟という存在から日本人の心を強調した存在にまで変化する。

「神宮」と「神都」である宇治山田周辺の近現代史を神社界といういわばインサイダーからではなく外部から客観的かつ批判的に述べている研究は少ないという。神宮と政治の関わりは一貫している訳ではない。また国民と神宮の関係も時代とともに変化している。

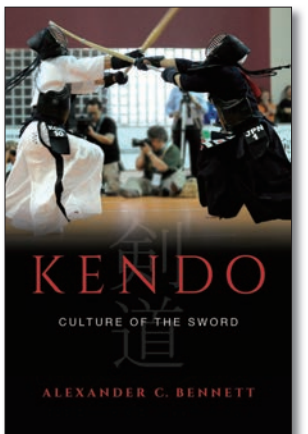
著者は、本書のテーマは近代の伊勢を繻く鍵として政治権力を捉え、神宮の近現代の変化を天皇、国家、国民との関係を軸に論述することであり、本書の目的は神宮がいかにダイナミックな近代史を歩んできたかを、そして、近代日本にとっていかなる存在であったかを読者に伝えることであるとしているが、著者が本書の中で語る以上に神宮はダイナミックに変化しながら天皇、国家、国民との関係を時代に応じて築いてきたと感じざるを得ない。神宮のあり方はじめ未来の神宮を考える上で、また神社の時代に応じた在り方を模索する上でも非常に参考になる一冊である。

Kendo—Culture of the Sword

Alexander C. Bennett[著]

University of California Press、2015年7月刊、328ページ、ISBN978-0-5202-8437-1、\$32.95

評／ジェームズ・バスキンド(名古屋市立大学／大学院・人文社会系研究科准教授)



アレックス・ベネット氏により、すべての武道愛好家が歓迎する一冊が刊行された。その本は、『Kendo: Culture of the Sword』(剣道—剣の文化: 訳・評者。以下同)という題名の通り、剣道における歴史を取り上げただけでなく、広範囲に亘り日本における剣の文化やその位置づけを検討しながら、剣道を中心に「伝統武芸」というジャンルに批評的なメスを入れ、解剖してくれている。そうすることで、どのような政治的・社会的な諸要素がその「伝統」の形成や変容に貢献してきたのかを紹介する。この本を執筆した一つの動機は全世界の剣道の理解における空白を埋めるためであると、著者自身が述べている。その意味ではこの意欲的な一冊が立派な成功を収めていると言っていいただろう。

一つの大きなメリットは、予備知識のない門外漢でも十分にこの一冊を楽しむことができる点である。Kendo Basics (剣道の基礎)という序章があり、その中で、著者の個人的な背景、剣道という道を歩んできた動機や経緯を赤裸々に述べ、図や表を活かしながら剣道の道具や競技としてのルール、そして、その目的や現代的意義をわかりやすく提示している。この序章を読むと、読者は剣道の防具を装着したかのような気持ちになり、日本文化における剣道というテーマと取り組む準備ができるのである。

第一章は「The Art of Killing: Swordsmanship in Medieval Japan」(殺生の術—中世日本における剣術)であり、武芸をめぐる豊富な情報に詳細な分析を加えた意欲的な一章である。武士・サムライの起源と形成を取り上げる中で、その位置づけとその言説を明らかにする。この章の他の小見出しは「中世の交戦と剣ミュトス」、「暴力を美化すること」、「全体的な武芸流派の形成」、「剣術の三大流派」、そして「無比の剣術家」と続くバランスの取れた構造を提示する。

第一章に対して、第二章は「The Art of Living: Early Modern Kenjutsu」(生きる術—近世の剣術)というタイトルで、近世の剣術を検討しながら、この平和な時代における武芸流派の新たな機能や剣術の知的化を考察する。それに剣の精神化や商業化という課程も迫り、そして剣の競技化というテーマでこの章を締め括る。

第三章は「The Fall and Rise of Samurai Culture: Kenjutsu's Nationalization」(サムライ文化の崩壊と再生)であって、剣術の国家化というテーマを扱っており、歴史的背景を考察する。明治の動乱期に剣術がどのように交戦の武器から日本の精神のシンボルに変容したかというプロセスを説明する。その中で、武芸が教育制度に取り入れられた経緯が細かく記され、貴重な指摘や洞察が提示されている。

第四章の「Sharpening the Empire's Claws」(帝国の爪を研いでいる)で、剣道は日本人の独自性の表現から軍事化の手段へと変容していくのである。この章は特に興味深く、戦時中の日本政府の政策に応じた剣道や武芸の変遷を浮き彫りにし、このテーマの研究における大きな空白を埋めていくのに大いに貢献している。

第五章、「Kendo and Sports: Path of Reason or Cultural Treason?」(剣道とスポーツ—道理の道か文化的反逆罪か)は戦後の剣道の再編成とその発展をたどっていく。日本の独自性を表す武力の手段からどのように教育・社会に貢献できる自己修養の媒体へと発展し、新たに解釈・提供されていったのかを解明する。

そして、最後の章「Crossing Swords and Borders: The Global Diffusion of Kendo」(剣と国境を交差すること—剣道の世界的普及)は現代の剣道の国際的な普及の有様を述べており、剣道の国際的な側面を考えれば、その波瀾万丈の発展を新たに実感する。エピソードも著者が剣道という道を歩んできた自省録のようなもので、この一冊を締め括る適切な結末である。

全面的に、この本はどの読者の期待にも応える一冊で、研究者、武道家、日本文化のファンなど、それぞれの関心ごとに触れている。著者が言う「剣道の理解における空白を埋めるため」というこの本の目的に成功しただけではなく、その埋め立てた地盤に剣道へのモニュメントを立てることまでできている。

三宅善信理事長

8月4日、比叡山宗教サミット
世界平和祈りに出席
8月18日、コルモス常任理事会
に出席
8月26日、パチカンでフランシ
スコ教皇に謁見
8月29日、ソウルで開催された
普遍的平和連盟の世界サミット
パネリストを務める



シリア等紛争地域の宗教指導者と共にパネリストを務める

9月15日、勅祭石清水祭に列席
9月29日、知恩院でWCRP理
事会に出席
10月3日、宗教倫理学会に出席
10月15日、上賀茂神社遷宮祭に
列席
10月17～18日、ソルトレイクで
万国宗教会議に出席
10月27～28日、ローマで第二パ
チカン公会議50周年国際シンポ
に出席



万国宗教会議の分科会で持論を展開する

11月5日、山梨で世界連邦日本
宗教委員会全国大会に出席
11月6日、呉善花理事の出版記
念パーティに出席
11月16～18日、イスタンブール
で開催されたG20宗教サミット
で、モデレータとパネリストを
務める



G20諸宗教サミットでモデレータを務める

11月21日、出雲大社の神在祭の
「稲佐の浜」神迎祭に参拝
12月27日、コルモス会議の研究
集会でパネリストを務める
ファビオ・ランベッリ理事
2015年は、カリフォルニ
ア大学サンタバーバラ校東アジ

ア言語文化学科長を勤めながら、
神道研究および日本宗教研究を
促進する努力を続けた。日本宗
教講演シリーズを主催し各国で
活躍する学者を招聘、国際シン
ポジウムやワークショップを開
催することにより、神道をより
広い学術的枠組みの中で捉え直
そうとする活動を展開。現在、
次の研究計画「海からみた日本
の宗教史」に携わっている。そ
の一環として、2016年6月
に国際シンポジウム「神道思想
史におけるトランスナショナル
な次元」、「19世紀末から20世紀
半ばまでの天皇崇敬の諸形態」
を開催予定。

マイケル・パイ理事

書籍発行：『Japanese Buddhist
Pilgrimage』2015, Sheffield
(UK) Bristol (CT, USA).
Equinox Publishing Ltd. 315
pages, illustrated.

この本には、日本仏教におけ
る巡礼が紹介されている。西国
の三十三観音霊場と四国の八十
八霊場を初め数多くのお巡りを
研究。その背景として神道関係
のお巡りも紹介。仏教と神道で
違うお巡りの意義についても詳
しく説明している。この本は主
に仏教における巡礼の研究書で
あるが、同時に初めて宗教学者
の立場から書いた神道的なお巡
りの研究書である。

岩澤知子理事

書籍
・Chapter 2: Philosophical
Implications of Shinto. In
The Oxford Handbook of
Japanese Philosophy [Oxford
Handbooks Online (オンライ
ンテキスト)にて先行出版。書
籍も近々出版予定。] 2015
年7月。
論文
「神話から探る日本人の宗教的
意識」(中国語版)『日本の宗教
思想と文化―神道を中心に(日
本思想文化史研究・初集)』(南
開大学日本研究院、天津人民
出版社出版)、2015年1月、
51-59頁。

「古代日本に見る『このち』の思
想―『荒魂』の思想が切り開く
『野生の知』『地球システム・
倫理学会会報』第10号、201
5年10月、112-118頁。
講演
「The Japanese Kami and
Sense of the Sacred(英語講演)」
明治神宮武道場・至誠館主催「海
外研究生講習会」2015年4
月、「第6回 海外指導者講習会」
2015年5月。

アレクサンダー・ベネット理事

書籍
Kendo: Culture of the Sword,
University California Press,
2015.



『神話・伝承学への招待』
編者：斎藤英喜、思文閣出版、二〇
一五年、二二〇〇円(税別)
『神道と学問』
阪本晃丸、神社新報社、二〇一五年、
一五〇〇円(税別)
『伊勢参宮日記を読む』
甲斐素純、海鳥社、二〇一五年、一
八〇〇円(税別)
『皇居の近現代史：開かれた皇室像
の誕生』
河西秀哉、吉川弘文館(歴史文化ラ
イブラリー)、二〇一五年、一七〇
〇円(税別)

Essay Competition 2015審査結果

今年もEssay Competitionに多数のご応募をいただき、あ
りがとうございました。厳正な審査の結果、どの応募論文も、
あと一步、受賞のレベルに達しないと判断し、2015年は残念
ながら「受賞なし」と決定いたしました。

皆さまには来年の良き成果につながりますよう、ますます
研究に励まれ、次回改めてご応募いただけますと幸いです。

神道国際学会からのお知らせ

◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。

◎ご入会のご案内: 神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

一般会員(年会費)	3,000円
賛助会員(年会費)	10,000円
(法人会員(年会費)	100,000円)
特別賛助会員(個人・一時金)	30,000円
特別賛助会員(団体・一時金)	500,000円

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shintou.org

編集後記
明けましておめでとうございま
す。皆さんにとって2016年が
収穫の多い年でありますように。
『神道フォーラム』52号をお届け
します。いかがでしょうか。是非
ご感想、ご批判などをお聞かせく
ださい。より良い『フォーラム』
にしていきたいと思えます。今回
はお馴染みの「神道DNA」、「神
社巡り」や「書評」欄は継続的に
掲載しましたが、新しいコーナー
として「歴史絵葉書シリーズ」を
始めました。そして今回の一面記
事は「フィールドワーク」の報告
です。新しい企画でしたが、大成
功だったため是非今年も実施して
みたいと思います。ご参加くださ
い！(丁B)